



1636年～1869年(約230年)

伊予西條藩を知る ②

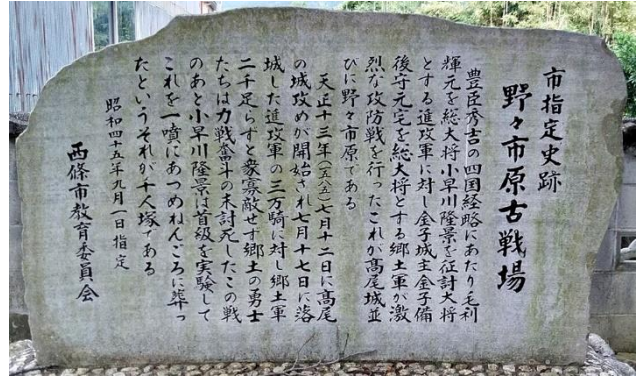
(第一次西條藩)一柳家、(第二次西條藩)松平家



四国攻め「天正の陣」

天正13年 | 1585年7月

天正年間、土佐の長宗我部元親(ちょうそがべもとちか)は阿波・讃岐を手中に収め、伊予の国と併せて天正13年春に四国制覇を成し遂げた。その夏には、羽柴秀吉(豊臣秀吉)は全国統一事業が順調に進むなかで、中国・毛利氏との和睦が成功すると四国平定へと動き出した。



天正十三年(1585)、前年からこの春にかけて四国統一を成就した土佐の長宗我部元親は、実子の人質として大阪へ送り、伊予と土佐の二国の領有を秀吉に認められたが、一方小早川隆景(こばやかわたかかげ | 毛利元就3男)が伊予を所望したため、秀吉はこれを認めて長宗我部との約束を破棄して人質を土佐に返してきた。

元親はこれに激怒し、秀吉の意に従わなかったため、秀吉は弟の秀長を総大将として紀伊、淡路、伊予三方面から約10万以上の征討軍を送り込むことになり、毛利氏に対しても伊予国出兵を要請した。新居・宇摩の諸城主が集まり、中国勢・毛利の大軍が来攻することについて討論した。「高峠評定」「澄水記」「天正陣実記」「天正の陣実録」には、大略次ぎのように記されている。

一座の大半が降参すべしとの意見でほぼ一致していたが、最後に金子備後守元宅(かねこ もといえ)が次のような意見を述べた。『小身の武士ほど浅ましきはなし。昨日は長宗我部に手を下げ、今日は小早川に腰を折り、土佐の人質を振り捨てて他人に後ろ指をされんこと心苦しき限りなり。所詮眉をひそめて世を渡らんより、討死して名を後世に顕さんには如かじ。』と。この意見に一座は息を飲み、反対する者も口をつぐんだと言う。このため、四国の大半がギブアップする中で、当地方は僅か3千人足らずの兵力で3万5千人余の大軍勢に立ち向かい、玉砕を覚悟で敢然と決戦する道を選んだ。これに参加した諸将は、宇摩・新居郡の旗頭であった高峠城主 石川備中守をはじめ金子・高橋・松木・藤田・菟田・野田・近藤・塩出・徳永・真鍋・丹・久門・難波江などが西条市氷見の高尾城に拠って抵抗した。

全軍の指揮をとったのは、伊予国新居郡金子備後守元宅であり、総勢 600 程であった。

小早川隆景は、主力をもって高尾城を包囲、別動隊をもって、元宅の弟対馬守元春の守る金子城以下の諸城を攻め落とし、七月十二日、高尾城攻防戦の火蓋が切られた。連日にわたる激戦の末、十四日には支城の丸山が落ち、勢いを得た毛利軍は本丸をめざして鉄砲をつるべ撃ちし、このため城兵の多くが失われた。それでも元宅は頑強に抵抗したが、衆寡敵せず、自ら城に火を放ち残存将兵とともに麓の野々市原に討って出て、元宅以下将兵六六〇余りが夏草を朱に染めて壮烈な最期をとげた。

高尾城落城後攻撃軍の総大将小早川隆景は、野々市ヶ原において首実検を行い、香花の枝をとって唱えた偈の一句、「討つも夢、討たるもまた夢なり、早くも覚めたり汝等が夢」を手向け、数百の屍を集めて葬ったと言う。「千人塚(首塚)」 時に天正十三年(1585) 七月一八日であった。